

受付番号

## 留学・研究計画書

|   |                         |
|---|-------------------------|
| 氏名 森 万佑子  | 留学機関名<br>ソウル大学校人文大学     |
| 留学先国名 大韓民国  | 留学期間 西暦 2010年2月～2012年1月 |
| 研究テーマ<br>朝鮮近代(1884～1905)、朝鮮政府の外交政策と東アジア国際関係   |                         |
| 研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)   |                         |
| <p><b>1. 研究目的と研究背景</b></p> <p>申請者の研究は、19世紀末から20世紀初頭にかけての朝鮮の一次史料に基づいた実証的な外交史研究を重ねることで、朝鮮政府の外交政策の実態を解明し、近代東アジア国際関係史における朝鮮の位置づけを再評価することを目的とする。</p> <p>これまでの朝鮮史研究における通説的見解は、1880年代から日清戦争以前にかけての朝鮮は、清朝との朝貢体制と欧米諸国との条約体制という相矛盾する二つの世界システムの中にあり(原田環)、日清戦争後の朝鮮は、各国に支援を要請して独立を守ろうとする中立化政策をとった(森山茂徳)というものであった。しかしながら、朝鮮史研究も依拠してきた朝貢体制という概念そのものが実証性を欠いていることが指摘されるようになり(岡本隆司)、朝鮮政府の外交政策も、かつて支配的であった枠組みのみによって理解できるものでないことは明らかである。また申請者は、朝鮮近代史研究がこれまで思想史研究に偏重してきたことに鑑み、これまで十分に論じられなかった朝鮮政府の外交政策策定過程や現場の実態を外交史研究の方法論を用いて解明し、朝鮮近代史を再構築できないかという問題関心も持っている。そのような研究を通して、朝鮮近代外交の開始といえる甲申政変直後(1884年)から韓国併合に至る時期の東アジア国際関係史について、朝鮮の視点か新しい枠組みを提示したいと考える。</p> <p><b>2. 研究内容と学術的意義</b></p> <p>申請者は、修士論文で1884年から1894年までの外交文書を用いて朝鮮政府の外交政策を検討し、朝鮮政府は①欧米諸国と締結した条約に独自の意味づけを行っていたこと、②1886～1888年を画期として国際法に即した外交機構の整備を行なったことを明らかにした。これらは、枠組み先行になりがちな先行研究では指摘されてこなかった点である。博士論文の執筆では、朝鮮政府の国際法受容に関する①の問題、朝鮮政府の国際政治観に関わる②の問題について時期を1905年まで広げて検討を深めるとともに、ソウル大学校奎章閣を研究活動の拠点として奎章閣所蔵の外交文書・在外公館記録を分析する傍ら、他の史料館所蔵の史料も合わせて、史料実証的な手法で朝鮮近代外交史を明らかにする。</p> <p><b>3. 社会的意義</b></p> <p>申請者の研究は時代の要請に応えるものである。東アジア近代史は日中韓において、韓国併合100年を翌年に迎える今日においてもなお外交問題にまで発展する敏感な問題である。それにも拘らず、日本には朝鮮近代史を専攻する若い研究者が少なく、学会が社会の需要を満たせない状況になりかねない。このことに鑑みると、後進の育成や多様な歴史認識の構築といった観点も含め、申請者の研究は社会的に重要な意義をもつと言える。</p> |                         |

# 成果報告書

記入日 2012年 2月 4日

|   |               |                        |
|---|---------------|------------------------|
| 氏名 森 万佑子  | 留学先国名<br>大韓民国 | 所属機関<br>ソウル大学校人文大学国史学科 |
| 研究テーマ：朝鮮近代(1884～1905)、朝鮮政府の外交政策と東アジア国際関係  |               |                        |
| 留学期間： 2010年 2月 ～ 2012年 1月   |               |                        |
| <p>1. 留学全般に関する感想</p> <p>まずはじめに、2年間韓国ソウル大学校へ留学する機会をいただいたことに深く感謝いたします。ありがとうございました。</p> <p>留学を終えて一番強く思う感想は、ありきたりですが「韓国を知った」と思えることです。</p> <p>インターネットが普及した昨今、研究に必要な史料や図書は世界どこにいてもインターネットで閲覧できるようになっています。そのため、「資料収集」は留学の主要目的ではなくなりつつあるように思います。また、韓流によって日本にいながらも韓国文化に接する機会に恵まれます。しかし、それでもなお留学の意義が色あせないのは、その国で生活しその国の人々と直接触れ合う体験を通して、その国を肌で感じる事ができるのは留学以外に方法がないからだと思います。私の場合、具体的には韓国の研究者の世界と韓国の地域文化を肌で感じる事ができました。</p> <p>私は、韓国ソウル大学校人文大学国史学科に2年間、博士課程の身分で留学しました。留学を開始する直前まで、博士課程に入学するか研究員として留学するかを非常に悩みました。前者の場合、授業についていくのが大変で自分の研究が思うように進まないことが憂慮されたからです。しかし「若いうちの苦労は買ってでもした方がいい」という言葉があるように、大変だと言っても韓国の大学院で学生生活を送れるのは今しかできないことではないかと思い、入学を決意しました。</p> <p>韓国近代史を専攻する私にとって、ソウル大学国史学科はまさに研究の本場です。そこで、私は他の韓国人学生と同じように授業に出て、レポートを書き、時には一緒にお酒を飲んで生活しました。韓国の大学院は日本の大学院と異なり、取得しなければならない単位数が多く、授業も毎学期必ず3コマ(1コマ=3時間)取らなければなりません。また、レジュメ式の発表を主とする日本の授業と違い、ソウル大國史学科では毎回レポートのような文章形式で発表します。そのため、毎週3コマの授業準備をしていると1週間があっという間に終わってしまいました。授業は形式は、毎週1冊の本を読んで書評を作成し、授業でそれを発表・討論するというのが一般的でした。授業準備では、韓国語で読み・書きすることが想像していた以上に骨の折れる作業でした。従って、学期中には自分の研究に取り組むのは難しく、休み期間に史料収集や論文執筆を集中して行いました。</p> |               |                        |

しかし、今振り返ってみると、この留学期間が人生の中で一番勉強した気がします。そして、それは勉強するのに最適な環境であったからだと思います。日本では韓国史の講義は各大学1～2個しかなく、専攻する学生も日本史や中国史に比べて多くありません。他方、ソウル大学校国史学科には古代史から現代史まで数多くの授業が毎学期開講され、また大学院には韓国史を専攻する学生が50人以上います。韓国史をこんなにも集中して仲間と共に学べる環境は後にも先にもないように思います。このような留学生活を送れた結果、ただ単に韓国の学生と仲良くなったということに止まらず、韓国史を学ぶ学生の生活様式やものの考え方など、韓国の研究者の世界を知ることが出来ました。そして自分も同じ韓国の大学院の博士課程を単位取得退学できたことで、その世界に直接足を踏み入れることもできました。このことが、留学した最も大きな意義であり、今後研究者になる上でとても良い経験になったと考えます。

もう一つは地域文化に接したことです。ソウル大学は冠岳山という山の中にあり、学校内に多数の寄宿舎、食堂、売店、病院、郵便局、銀行、クリーニング店、そしてスポーツジムに至るまで生活に必要な施設は全て揃っています。学内の寄宿舎に住んでいた私は、学期中は授業の準備で忙しく学外に出ることはほとんどありませんでした。

その代わり、休み期間には積極的に外に出るようにしました。韓国の町に気軽に出かけられるのは留学期間中しかないと思ったからです。なので、ソウル市内は勿論、研究調査も兼ねて地方にも積極的に行きました。KTXや高速バスを駆使し、釜山、慶州、安東、大邱、木浦、光州、全州、錦山、春川、江華島など多くの地方を訪れました。日本と違い、高速バスが発達している韓国では、当日思い立って高速バスターミナルに行き、空席のある切符を買って、地方行きのバスに乗ることが出来ます。主要な都市には10～20分おきにバスが出ていて、料金も片道1500円程度です。

しかし、地方の町おこしのようなものが日本のようには発達していないので、地方の高速バスターミナルに降り立つと、どの町も同じような雰囲気、これといった特徴を感じる事ができないことが一般的です。また、公共交通機関が発達していないためバスが1時間半に1本というのも珍しくなく、高速バスターミナルから複数の目的地を巡ろうとすると公共交通機関では限度があり、車がないと非常に不便でした。ただそうは言っても、町の中に入っていくとその町の特色が見えてきてとてもおもしろかったです。中でも、木浦の昔の日本人町（日本の家屋が残っていて、日本の港町に来た錯覚を得たほどです）や、高麗人参で有名な錦山で高麗人参が大量に売られている市場はとても印象的でした。私は歴史を専攻していますが所属は「地域文化研究」なので、このように韓国の地方都市に行き、ソウルだけに止まらない様々な文化や風土に接することができたのは、地域研究として韓国の歴史を見る上で非常に有益な体験になりました。

## 2. 研究面での成果

研究面での成果は次の五つです。一つ目は韓国語の上達です。韓国語は大学1年次から第二外国語として学んできましたが、これまで韓国に留学した経験がなかったため、聞き取りと会話には自信がありませんでした。しかし、今回2年間の韓国留学を通して、韓国語をほぼネイティブレベルにまで上達

させることができたと思自負しています。聞き取り、会話は日常生活は勿論、大学の授業についていくにもほとんど支障がないレベルにまでなりました。また、毎回授業で提出する発表文を先輩や後輩が添削してくれたお陰で、作文能力も飛躍的に上達しました。これらの結果、後述するように国際シンポジウムで韓国語で発表・質疑応答をしたり、韓国語で論文を投稿できるまでに至りました。さらに、2011年1月～5月には韓国語教師養成課程（韓国語を母国語としない者に韓国語で韓国語を教えることを習得する課程）を受講し修了しました。この課程では、これまで学んだことがなかった韓国言語学や韓国語学習法などを学べたことと、教育実習の機会を得たことが、とても良い経験になりました。韓国語に関しては、研究者としても韓国語教師としても必要な水準に達することができたと思います。

二つ目は、韓国の「知性史」を習得したことです。「韓国の研究スタイルを学ぶこと」を研究計画に記しましたが、上で言及したように、韓国の大学院の授業は、史料講読を中心とする日本の大学院の授業と異なり、担当教授が選んだ研究書を読み、その内容を適切に把握し、問題点を指摘するスタイルでした。そのため、2年間に膨大な量の本や論文を読みました。その内容は、自分が専門とする韓国近代史・外交史に限定されるものではなく、古代から現代まで、政治史から都市史や生活史まで多様な分野にわたりました。その結果、自分の研究分野に限定されることない、韓国の「知性史」を習得できました。

三つ目の成果は、歴史研究における史料に対する姿勢を改めることができたことです。研究計画書で収集計画を示した史料は留学中に全て閲覧・収集しました。その過程では、新しい史料を発掘できた一方、史料が想像していた内容と異なるもの（例えば、研究計画で示したロシア関係の史料）も少なくありませんでした。韓国史を研究する上で関連史料を最もたくさん保有しているのは韓国であり、私はそこで研究に関連する史料をほとんど閲覧することができました。これは大きな成果でした。しかし、もっと大きな成果だと感じるのは、「新しい史料を使えば良い研究になる」という考えを改め、新しい史料（＝未刊行史料）は刊行史料を確実に活用してはじめて活かされるものだと分かったことです。未刊行史料は確かに有益な内容であっても、それだけでは論文は書けません。未刊行史料を礼賛する傾向がありますが、私のように歴史を専攻する場合、既に刊行されている実録や日記を正確に読み込み、その上で未刊行史料を使用すべきであるということ、史料調査を通して学ぶことができました。

四つ目は、研究計画で「駐天津朝鮮領事について明らかにすること」とした部分の研究をまとめ、論文を2本作成（1本は現在投稿中）できたことです。研究計画に沿って史料収集をし、論文にまとめた内容は、天津に駐在した使節（1883～1894）は、駐津大員（1883～1886）と駐津督理（1886～1894）に分けられ、前者は清朝との宗属関係に基づいて派遣された使節であり西洋諸国が派遣した領事といえる職位ではなかったこと、後者は1887年に「駐津督理公署章程底稿」を作成し国際法に照らした使節に改めようとしたが任地ではそのように認められなかったことを明らかにしたことです。当時、朝鮮は清朝と宗属関係を有していたため、天津に駐在した使節を、条約関係の国家間が派遣する公使や領事のように扱えず、その結果、宗属関係と条約関係の二重の関係をもつ朝鮮の位地をよく表した使節になりました。留学期間を通して新たに得た見地がまさにこの部分で、これまで「朝鮮の近代化」を尺度に、その事例がどれだけ近代化していたかということが無意識に測ってきた傾向が自分の中にはありましたが、研究をすすめていくうちに「近代化」と必ずしも言い切れない部分にこそ朝鮮の近代の本質があるのではないかと考えるに至りました。つまり、朝鮮が理解した「近代」の内容は、西洋近代は勿論のこと、日本や中国が理解した

「近代」とも必ずしも一致するものではないということです。

四つ目の成果は、修士論文の一部を修正し、国際シンポジウム「1894年の朝鮮と東アジア歴史像の再照明－甲午改革、日清戦争、東学農民戦争」（2011年7月9日、於高麗大学校韓国学館会議室）で発表、「朝鮮から見た日清戦争開戦過程と宗属関係」という題名で『International Journal of Korean History』に投稿（2012年2月掲載予定）したことです。国際シンポジウムでは日本の研究者代表として、はじめに日本における日清戦争の開戦過程に関する研究史を整理しました。日本では日清戦争の開戦過程に関する研究蓄積が多いこと、具体的な内容では戦前の研究は開戦過程を宗属関係に言及しながら論じてきた点、戦後の研究では開戦過程の細かな経過が解明されてきた点を指摘しました。後半部分では、日本史研究が看過してきた日清開戦過程での朝鮮（この場合地理的な意味での朝鮮を意味する）での対応を見るため、駐朝鮮日本公使館が日本本国よりも日清対決に好戦的であったこと、また朝鮮政府が条約体制を活用して日本軍の駐屯を非難し各国に調停を求めたことを発表しました。この発表内容を加筆修正し、上記の論文としてまとめました。

### 3. 今後の計画

以上のような留学経験と研究成果をもとに、4月からは博士論文を完成させるため、東京大学に復学し、また日本学術振興会特別研究員として論文の執筆に集中する考えです。博士論文の具体的な内容としては、上で言及した天津に駐在した使節と日清戦争開戦過程に関する内容の他に、対外政策を担当していた統理交渉通商事務衙門の変遷（1887～1894）と1891年の神貞大王大妃死去に伴う告訃使・弔勅使派遣における朝鮮をとりまく国際関係を論文にまとめる予定です。これらは、国史学科の授業で課された期末レポートを書く中で構想を練ったものです。この研究を通して、これまで研究の空白であった1880年代後半から日清戦争に至るまでの朝鮮政府の対外政策を明らかにし、従来の「宗属関係と条約関係の対立・並存」という構図とは違う朝鮮近代の見方を模索したいと考えます。